

厚労科研 辻井班（発達研修開発）

5) PDCAサイクルから支援の質を
向上させていく

3. 実践を科学的に検証可能なものに
していくために

中京大学現代社会学部

辻井 正次

現場で支援をしているからこそ大事なこと(1)

- (1) 支援する前に、支援に必要な支援対象となる発達障害のある人の情報をちゃんと集めること!
- 情報がなければ、情報把握・アセスメントの実施
 - ①現在の適応行動(客観的な評価、具体的に何はできていて何はできていないのか)
 - ②これまでの大まかな経過と発達障害特性や知的能力等や発達状況の評価
 - ③保護者の支援についての準備状況等の把握
 - ④その他

現場で支援をしているからこそ大事なこと(2)

- (2) 支援対象となる発達障害のある人の状態像と情報をしっかり照合し、支援の計画を立てて、支援に取り組んでいく。
- 支援を行う場合に、支援対象となる発達障害のある人に対して、どういう支援をどのように提供し、どうなってもらいたいのか、本人や保護者の希望を聞きつつ、支援を組み立てていくことが必要である。

現場で支援をしているからこそ大事なこと(3)

- (3) 毎回の支援を行ったら記録と評価をして、今やっていることが効果があるのかを検討する。さらに、一定期間の支援をしたら、支援効果の評価を行って、このままの取り組みでいいのか考える。本人の精神的安定や満足度、保護者の満足度等も含めてもよい。
- 客観的な把握を含めて評価し、抽象的な表現ではなく、具体的な行動について評価することが望まれる。放課後等ディサービスなどで、「預かっているだけ」という意見も聞くが、その中で、何をしているのか説明ができなければ支援ではない。

支援が障害者総合福祉法で税金を使っている以上、 支援をした効果が説明できないといけない

- 発達障害のある人たちのさまざまな課題を考えると、1つの指標で効果を示すことができないのは事実。
- しかし、適応行動や、精神的健康さ、自己評価、体験の満足度など、多様な指標の中で、支援の意味について明確に説明できることは必要不可欠。支援者の自己満足ではなく、発達障害のある人たち（および家族）の客観的指標で照合もできる満足度が得られることは必須。
- こうした、現状の制度を維持し、発展させていくために必要不可欠な評価をしっかりとっていないといけない。そのためには、科学的根拠を持ったアセスメントとともに、科学的根拠のある支援を一定取り入れていく必要性がある。

発達障害のある人たちや家族が誤った情報に 振り回されないために

- 残念ながら、わが国においても、“発達障害は存在せず、医師と製薬会社の陰謀で作り出されたものだ”とか、“障害福祉サービス事業者が自分たちの儲けのために発達障害のある人たちや家族を搾取している”などの、“陰謀論”に振り回される本人やご家族がいる。カルト宗教等の関与もある。
- その結果、高額サプリや水等、あるいは書籍等を購入させられたり、身近な支援者との関係を崩してマッサージや整体治療や体操などに没入したり、補助医療にのめりこんだりしてしまうこともある。SNSは悪意ある勧誘の担い手になりやすいので、科学的根拠を持った再現性のある取り組みが何なのかということについて、しっかりと情報発信をし、支援者側が説明できることが大切。